令和５年５月１日（毎月１回１日）発行　　昭和43年１月10日第３種郵便物認可

MICHISHIRUBE

みちしるべ

No.894

2023
5
May

みちしるべ

Issue of May 2023
MICHISHIRUBE No.894

Contents

熊との遭遇／菅原　真 3

救いの手／阿部遼都 4

あなたを愛してくれる存在／小堀端智耶 6

路傍伝道―旧約聖書・ヨナ書より／岡崎隆司 9

この意味教えて（カタカナ篇）
No.17　クリスチャン／広沢　規 10

主と共に漕ぎ出す／中島　崇 12

☆当月号および過去１年分のみちしるべを、電子書籍版にてご覧頂けます。　https://e-michishirube.com

表紙写真：根開きブナ（鳥海山麓）

熊との遭遇

菅原　真

私の住む地域にある鳥海山（ちょうかいさん）（標高２２３６ｍ）は、東北では２番目に高い山で、「出羽富士」とか「庄内富士」と呼ばれています。そしてこの時期、雪が残る中腹では、根本を中心に丸く雪が溶ける根開きブナが一帯に広がり、その中で新緑の初夏の木漏れ日が降り注ぐ、とても生命力あふれる光景を見ることができます。（当号表紙写真）

13年前のことですが、私がそのブナ森で、一人写真を撮っていた時、背後から「ザザ！」という雪を削るような音がしたので振り向くと、なんと数十ｍほど先に私をジッと見ている一頭の熊がいたのです！こうした時、取るべき正しい対処は、熊に対して両手を広げるなどし自分を大きく見せ、そのまま視線を逸らさず、自分との間に障害物を置くようにして離れることですが、その時の私はこの知識がほとんどなかったため、熊から視線を外し、縮こまって背を向け、荷物を抱えてその場を立ち去るという、真逆な方法で逃げてしまったのです。

幸いにも、危険と言われる子連れの熊ではなく、至近での出会い頭のような遭遇ではなかったので、追われて襲われることはありませんでした。しかしそんな逃げ方では逆に死を招くことになっていたかと思うと、今でもゾッとします。神様に守られたと、強く感じました。

ところで皆さんは、すべての人がやがて直面する「死後のさばき」から逃れる、正しい方法があるのをご存知ですか。それは神のことばである聖書に記されています。

「知恵のある者のおしえ（神の福音）はいのちの泉。これによって、死の罠から逃れることができる。」

（箴言13章14節）

聖書が語る神の福音を信じることこそ、そのさばきから逃れる、唯一無二の正しい方法です。ぜひ、この福音を受け入れますように。

救いの手

阿部遼都（りょうと）

私は高校生の時、ラグビーをやっていたのですが、激しいスポーツゆえにその練習中、頭を強く打ったことがあります。違和感があったので、すぐに病院に行き、ＭＲＩを撮ってもらいました。その時には特に異常は見られなかったのですが、２～３ヶ月後、もう一度、検査してみたら、左脳の４分の１が血で埋まっていて、ゾッとしたのを覚えています。

それは「慢性硬膜下血腫」という疾患でした。頭蓋骨直下にある脳を覆う硬膜と脳との隙間に血液が徐々に溜まっていき、頭痛等がひどくなっていくというものです。この疾患は、高齢男性に多く見られるとされていますが、（男女比７対３）若年女性や頭部外傷歴がない人でも発症する場合もあるそうなので、読者の皆さま方も気をつけていただきたいと思います。

私はその再検査後、すぐに大きな病院に運ばれ、そこで手術を受けたのですが、その手術が全身麻酔ではなく、局所麻酔だったことに衝撃を受けました。まず、頭に麻酔を５～６回打たれ、頭をラップのようなものでぐるぐる巻きにされて、手術がスタートします。手術室の中では、オーケストラのようなＢＧＭが流れていたのですが、そんなものでは患者さんは落ち着けるわけがないのです。

そのあと、頭皮を切って、なんとドリルで頭蓋骨に穴を開けるという作業に入ったのです。意識のある状態で、頭皮が切られ、ドリルでガガガガッと頭蓋骨に穴を開け始め、意識が吹っ飛びそうになった瞬間、「大丈夫ですよ～すぐ終わりますからね～」という声と共に、誰かが私の右手を強く握ったのです。もちろんラップでぐるぐる巻きの状態です

から、その時は誰が私の手を握ったか分かるわけもないのですが、私も、その手を強く握ると自然と吹っ飛びそうだった意識が戻って、無事に手術が終わったのです。

それが誰だったかは尋ねたりもしなかったので、結局よく分からないままなのですが、私はこの手術において、誰かが差し伸べてくれた手に本当に助けられたな、と感じる体験をしたのです。

さて、聖書には次のようなことが記されています。

「イエスは深くあわれみ、手を伸ばして、彼にさわり、

『わたしの心だ。きよくなれ』と言われた。

すると、すぐにツァラアトが消えて、その人はきよくなった。」

（マルコの福音書1章41、42節）

イエス様は、神様であられるので、触らずとも治せることができたはずです。それなのに、あえて皮膚病（ツァラアト）を患っている人に触れられました。それはその人に直接触れることで、愛の心を示されたかったのだと思います。

今日、主イエス様は天へと帰られ、この地上にはいらっしゃいませんが、その天からどんな人に対しても救いの手を差し伸べてくださいます。皆様も聖書を通して、その暖かく愛に溢れた主イエス様の手に触れ、たましいの救いを経験してほしいと思い、このことを書かせていただきました。

あなたを愛してくれる存在

小堀端智耶

少し前の話ですが、自分の両親に対して手紙を書く機会がありました。そのおかげで、今までの人生の中で、両親が私にどのように接してくれていたかを思い返すことができました。私はこれまで両親の思いに気づかず、自分勝手な生き方をしたり、反抗したりと、かなり迷惑をかけたと思いますが、それでも両親は私を変わらずに大事にしてくれました。そして改めて私は、両親から愛されていたのだなと気がつきました。

そして私が聖書に接した時、そんな親以上に私を大事にしてくれている方がおられることを、はじめて知ることができました。それが、すべてのものをお造りになった創造主なる神様です。

「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」

（ローマ人への手紙5章8節）

このみことばが語るように、神様が愛を示してくださったのは、私たちがまだ神様を知る前の、罪の生活の中にいる時でした。私はかつて、神様がおられることすら知りませんでしたが、そんな私を神様は愛してくださっていたというのです。

私の感覚からすると、このことは不思議に思えました。私の今までの経験の中で、人に対して親切にしたり、愛情を示すのは、自分にとってその人が良くしてくれたり、メリットのある場合がほとんどでした。いわゆるギブアンドテイクの関係です。逆に自分と仲が悪かったり、自分にとって損となる人には愛情を示すことは難しいことです。このように私の愛は、「～してくれたら愛する」という条件付きなのですが、神様の愛は私とはまったく正反対です。私たちがどうであったにしても、変わらず愛してくださるのです。

先日、欲しい物があり、捜していたところ、インターネットのオークションサイトで、いくつか見つけることができたのですが、同じ物でも金額が違うのです。よく見てみると、新品の商品は値段が高く、逆に傷があったり不良品だったりすると低い値段で売られていました。一般的に本来価値があり、高く売り買いされている物でも、傷ついていたり、欠けていたりするとその価値は低く評価されてしまいます。

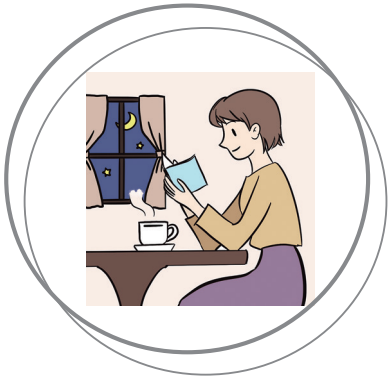
人は、もともと神様に創造された時点で、欠けのない非常に良いものでした。しかし、罪が入ってしまったため、神様から見て、何も良いところのない、無価値なものとなってしまったのです。しかし神様は、そのような私たち一人一人に対し、罪を犯す前と同じ価値を認めてくださり、変わらぬ愛を注ぎ続けてくださっているのです。

その神様の愛は「**キリストが私たちのために死なれたこと**」によって、示されました。イエス・キリストは歴史上の人物として、世の中一般で知られていますが、実は、あなたの罪の身代わりとして死んでくださり、三日目によみがえられた、救い主（キリスト）なのです。

神様は私たちの罪のすべてを、何の罪もないこのイエス・キリストに負わせ、この方を十字架につけられました。私たちは本来、自分自身の罪のために、死後、さばきを受けなければならないのですが、イエス・キリストが私たちの身代わりに死んでくださることで、私たちのすべての罪は赦され、そのさばきを免れることができるようになったのです。神様は、ご自身のひとり子というこれ以上にないほどの大きな犠牲を、あなたを救うために払われたのです。

そしてかつて私と同じように、神様のことをまだ知らない方や、聖書に出会ったばかりの方、また、この小冊子を読んでおられるあなたのことも愛しておられるのです。このみことばには、「**私たち**」ということばが三回出てきます。つまり、罪人さえ愛される神様の愛の対象は、私にも当てはまり、これを読んでおられるあなたにも当てはまるということです。つまりこの「私たち」とは、あなたを含む、すべての人のことなのです。

どうかあなたがこの愛を知り、神が遣わされたイエスをご自分の救い主と信じ受け入れられますように。



路傍伝道

―旧約聖書・ヨナ書より

岡崎隆司

「あと四十日すると、ニネベは滅びる。」（ヨナ書3章4節）

紀元前8世紀。ニネベ（現在のイラク北部）の町でのこと。

「王よ、変な男が叫びながら、歩き回っています。」

「すぐに、身元を調べろ。」

「名前はヨナ、イスラエルの預言者です。なぜか、遥かこの地に来て、預言しています。そして皆、彼の話に耳を傾けています。」

「イスラエルの巻物、聖書とやらを調べろ。」

「その昔、神は大洪水で世界を滅ぼしています。ソドムとゴモラの町は硫黄と火で焼かれています。王よ、悪名高き我がニネベの行いも、もしや…」

ニネベの王は布告を出した。

「人も家畜も、牛も羊もみな、何も味わってはならない。草をはんだり、水を飲んだりしてはならない。人も家畜も、粗布を身にまとい、ひたすら神に願い、それぞれ悪の道と、その横暴な行いから立ち返れ。もしかすると、神が思い直してあわれみ、その燃える怒りを収められ、私たちは滅びないですむかもしれない。」（同7～9節）

神は、ニネベへのさばきを思い直された。ヨナの路傍伝道は成功した。

時代は変わり、今、神はクリスチャンを通し、すべての人々に向けてこのようなメッセージを発しておられる。

「皆さん、すべての人はその罪のゆえに滅びに向かっています。しかし神の御子イエスは、私たちの罪を引き受けて、十字架にかかってくださいました。そしてヨナが魚に飲まれても三日の後に吐き出されたように、三日目に墓からよみがえられました。どうか、自分の罪を悔い改めて、このお方を救い主として受け入れてください。そうすればどんな罪も赦され、天国へと入ることできます。」

この意味教えて ―カタカナ篇―

No.17 ● クリスチャン

広沢　規（のり）

「あなたはクリスチャンですか？」

このような趣旨の質問をされることがよくあります。クリスチャンとは、一般的にはキリスト教の信者を示す呼び方なので、その場合、当然「はい」と答えるわけですが、正確にはクリスチャンとは「キリストを救い主として信じている者」または「キリストに属している者」という意味になります。

では、そのクリスチャンという呼び方は、いつ頃から使われるようになったのか、聖書の記述を通して考えてみます。参考までですが、口語訳聖書（日本聖書協会）では、クリスチャンと翻訳されていますが、新改訳聖書（日本聖書刊行会）では、「キリスト者」と翻訳されていますので、今回はそちらに倣うことにします。

さて、キリスト者という言葉は、聖書の中に三回使用されています。それらの聖句の意味を順番に考えてみます。

一・「弟子たちは、アンティオキアで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。」

（使徒の働き11章26節）

当時のユダヤ教徒は、「ナザレ人イエスが神に約束されたキリストである」と認めた人たちを、「ナザレ人の一派」（使徒の働き24章5節）、ユダヤ教の「分派」（同24章14節）、「宗派」（同28章22節）などと呼んでいました。すなわち、ユダヤ教から派生した一つのセクトとして扱っていました。

しかし、アンティオキア（現在のシリア）では、新たにイエスをキリストと認めて受け入れた人たちが増えようになり、周囲の人々は、ユダヤ教徒とは別に、彼らを認めて、クリスチャンと呼ぶようになりました。（同11章26節）すなわちこの時期に、従来のユダヤ教からは独立した信仰として、公に認められるようになり、歴史上重要な分岐点となりました。

二・「おまえは、わずかな時間で私を説き伏せて、キリスト者にしようとしている。」

（使徒の働き26章28節）

この言葉は、当時のユダヤの領主アグリッパ王が、使徒パウロから福音を耳にした時の発言です。彼は福音を素直に受け入れることはできませんでしたが、キリスト者には興味を示しました。主イエスの福音は、当時の世界にくまなく広まり、キリスト者の存在は王宮にまで知れ渡っていたのです。

三・「キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、このことゆえに神をあがめなさい。」

（ペテロの手紙第一・4章16節）

当時、キリスト者は、従来のユダヤ教徒やローマ帝国から激しく迫害を受けることになりました。使徒ペテロは、苦しみの中にあるキリスト者に対して主イエスにある誇りをしっかり持つように励ましました。

皆さまも、「ナザレ人イエスはキリストである」と信じて告白し、今後の人生をキリスト者として生きていく決心をしてください。そして周りの人からクリスチャンと呼ばれることを誇りに思う方となってください。

主と共に漕ぎ出す

中島　崇

人は大なり小なり専門性をもって生きています。多くは今やっている仕事・学業・趣味等が専門性に当たるのではないでしょうか。

私はドッグトレーナーとして、飼い主のお悩みをヒヤリングして、解決に導く仕事をしています。飼い主のご意見や犬の鳴き声などを聴いた上で、より良いトレーニングの仕方を助言しています。生き物を相手にしているため、その気持ちを100％理解することは不可能ではありますが、お互いが分かり合えた時、飼い主も犬も喜ぶ姿を見ることができるのは、この仕事をやっていてよかったと思う瞬間です。

私たちは自分でさえ何を考えているのか、何のために生きているのか分からないでいます。ましてや犬の気持ちさえ分かるわけがないのです、それを完全に理解している存在がいたら、それが創造主（神）なのではないでしょうか。

イエス様の最も身近な弟子のペテロは、元々漁師でした。漁師は魚の専門家であり、魚の住処や旬な時期や扱い方などを知るプロです。当時は機械もなく、長年の経験と勘を頼りに仕事をしていたのではないでしょうか。ただ、プロとはいえど相手は生き物ですので、まったく捕

れない日も多々あったでしょう。

ちょうどそのような時、イエス様はペテロにこう言われたことがありました。

「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい。」（ルカの福音書5章4節）

漁師でもないイエス様が、不思議なことに、漁についての指図をされたのです。

「先生。私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした。でも、おことばですので、網を下ろしてみましょう。」（同5節）

ペテロは多少、戸惑いながらも、とりあえず湖の深みに出ることにしました。

すると網が破れかけ、一隻では対応できないほど魚がとれたのです。結局二隻の舟が転覆しそうになるほどの大漁であったと聖書に書いてあります。（同6、7節）

この出来事を通し、次のことを教えられます。

●イエス様は神であること

イエス様は神の御子であり、この世界を創造され、自然界を支配されている方でもあります。たとえ漁師ではなくとも、魚のことを誰よりもよく知っておられるお方です。イエス様は人には知り得なかった魚の大群の居場所を示すことで（あるいはたくさんの魚を一ヶ所に集めることで）ペテロにご自分の神性をお示しになりました。

木はどうして育つのでしょうか。どうして水が存在するのでしょうか。どうして心臓は動き続けるのでしょうか。この自然界は、私たちには分からないことだらけですが、神はそのすべてを知っておられるのです。

●そのままで良いこと

イエス様の命令を聞いた時、ペテロにとっては最初、その意図を十分に理解できなかったことでしょう。ただ当時、イエス様は色々な奇跡を行っていたわけですから、もしかしたら少しは捕れるかもしれない期待と、そうではない不

安の気持ちが拮抗していたかもしれません。ペテロは半信半疑のうち「信」の部分に従い、舟を漕ぎ出しました。その結果、経験したことのないほど大漁を目にしたわけです。

このことから、イエス様に従う上で、最初から完璧な信仰や、十分な知識がなくてもよいと感じます。イエス様を信じる上で、聖書を全部読んでからとか、もっと立派な人間になってからという方がいますが、罪を悔い改める心と、素直にみことばを受け入れる姿勢さえあれば、イエス様はそのままのあなたに来てほしいと願っておられるのです。そこからがまずスタートなのです。そこからイエス様のことをよく知っていけばよいのです。

そのペテロは晩年、こう書き記しました。

「主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。」（ペテロの手紙第一・2章4節）

●イエス様に委ねる人生

生き物に関わる仕事をしている私は、ペテロが大漁を経験することによって、イエス様に畏怖の気持ちを覚え、この方に従っていこうとしたその心境がよくわかるのです。

なぜなら、私には動物が1秒後どういう動きをするかは分からないし、成功するかどうかも分からないからです。生き物というのは、それだけ人間の理解が及ばないことがあるのです。

だから私は、いつも仕事前にドキドキしています。そしていつも祈るのです。「神様、どうか今日もあなたの守りと導きがありますように」。すると神様は様々な結果と答えを出してくれます。おしっこがシートの上でできないワンちゃんがレクチャー後、初めてシートの上でするようになった瞬間によく出会うのです。飼い主は大喜びをし、私は「神様ありがとう」と胸をなでおろすのです。

イエス様を信じて漕ぎ出す人生は、その都度神様に守られていることを実感できるのです。

●聖書のテーマ――永遠のいのち

そして人は誰であろうと、死という最大のイベントを必ず通らなければなりません。そしてその先には神のさばきが待っています。（ヘブル人への手紙9章27節）私たちが犯した神への罪はそれだけ大きいのです。

それに対し、神の本質は「あわれみ深く、情け深い神」（出エジプト34章6節）です。ご自身のもとへと帰ることができない人間を見て、神はあわれみ、唯一の救済法を用意されました。それがイエス・キリストの十字架です。

イエス様は自分の罪のために死んだことを受け入れ、そのよみがえりを信じる者は、死を超えた永遠のいのちが与えられる、と神は定めておられるのです。

イエス様はこのように言われました。

「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。」

（ヨハネの福音書5章24節）

どんな人にも、この永遠のいのちを受け取る権利があるのです。どうかあなたがこの恵みを受け取り、今後の人生において、イエス様と共に信仰の海原へと漕ぎ出されることを願ってやみません。

みちしるべ5月号　第894号
令和５年5月1日（毎月１回１日）発行
発行所　伝道出版社
〒183-0056　東京都府中市寿町 2-8-9
TEL 042-366-7760
FAX 042-366-7790
編集人　伝道出版社　編集部
https://dendoshuppan.shop-pro.jp/
印刷所　株式会社　共同印刷所

昭和43年1月10日第3種郵便物認可
令和5年5月1日（毎月1回1日）発行
みちしるべ5月号　第894号
伝道出版社
〒183-0056 東京都府中市寿町2-8-9
定価1部 50円＋税　送料63円
振替00140-9-27336

Column

小さなベランダの小さな幸せ

私の住んでいるアパートには、小さなベランダがついています。そのベランダは部屋の南側に面しており、日中の日差しがとても良いのでハンモックを取り付けました。そのハンモックでのんびり過ごすのが、休日の楽しみの一つになっています。天気の良い日は、太陽の日差しが、とても気持ち良いので寝てしまうこともあります。

「光は心地よく、日を見ることは目に快い。」（伝道者の書 11 章 7 節）

太陽の日差しを浴びることは、私たちにとって、とても気持ちの良いものではないでしょうか。日光を浴びると、脳内で、精神を安定させる「セロトニン」という物質が分泌されるそうです。

このように、私たちが生きる上で欠かせないこの太陽ですが、決して偶然にできたわけではありません。太陽に限らず、この世界にある全てのものは、神様によって創られたと聖書は語っています。ですから私たちは日々、神様が創られたものの恩恵を受けて生活をしているのです。

そう考えると、あって当たり前と思えるものが、実はとても素晴らしいものだと、気づくのではないでしょうか。日々の生活の中にある小さな幸せから、神様の存在を知ることができれば幸いです。　（大野信二）

なお、くわしく聖書について知るために、下記の所へぜひおいでください。